

# 文化的多様性の価値理解に向けた基盤としての 中学校美術科学習に関する考察

ー 日本の伝統美術・工芸を扱った題材の指導と評価を中心に ー

竹内晋平

(奈良教育大学 美術教育講座 (美術科教育))

松井祐

(大阪教育大学 表現活動教育系)

隅敦

(富山大学 教育学部)

吉岡千尋

(神戸松蔭女子学院大学 教育学部)

Junior High School Art Studies as a Foundation for Understanding the Value of Cultural Diversity:  
Teaching and Evaluation of Traditional Japanese Arts and Crafts

Shimpei TAKEUCHI

(Department of Art Education, Nara University of Education)

Yuu MATSUI

(Division of Art, Music, and Physical Education, Osaka University of Education)

Atsushi SUMI

(Department of Education, Toyama University)

Chihiro YOSHIOKA

(Department of Education, Kobe Shoin Women's University)

**要旨：**本研究は、文化多様性に関する価値理解に向けた基盤を形成するため、日本の伝統美術・工芸を扱った中学校美術科題材における指導と評価を開発・提案することを目的としている。このため、ユネスコ総会で採択された「文化的多様性に関する世界宣言」の条文および先行研究における言説を踏まえて、文化的アイデンティティー育成の意義等に関する議論について概観するとともに、日本の伝統美術・工芸の現状についての考察を行った。その後、中学校美術科教科書における身近な地域の文化遺産を扱った題材の事例収集を経て、詳細な学習評価の計画等を含む「祭礼に関する鑑賞」を扱った題材の開発と提案を試みた。

**キーワード：**文化的アイデンティティー cultural identity

身近な地域の文化遺産 cultural heritage of familiar areas

祭礼に関する鑑賞 appreciation of festivals

## 1. はじめに

伝統美術・工芸を扱った学習については、現行の中学校学習指導要領に「伝統や文化のよさや美しさを感じ取り愛情を深める」<sup>1)</sup>と示されるなど、その意義は幅広く認識されていると考えられる。このような教育活動においては、学習者が伝統美術・工芸を過去の情報として表面的に理解することに留まるのではなく、Society 5.0を再定義する中で提示されている『『多様性』『公正や個人の尊厳』『多様な幸せ (well-being)』の価値』<sup>2)</sup>等につながる学び

であることが必要であると考えられる。

本研究の推進に当たり、「多様性」「公正や個人の尊厳」「多様な幸せ」等の価値理解に伝統美術・工芸等の存在が関連する可能性があることを意識するに至った契機としては、2019年10月に発生した沖縄県・首里城での火災についての報道がある。当時の報道では、被害状況とともに首里城火災の報を受けて涙を流す幅広い世代の沖縄県民の姿が伝えられている<sup>3)</sup>。近年になってからの再建でありながら、県民にとっての首里城は建造物の域を超えて、自身の生い立ちとともにある地域を象徴する誇りであったと推察される。焼失による県民の喪失感の大きさ

は想像に難くない。この首里城をめぐる報道は、伝統美術・工芸に関連する営みや存在が、人々の地域的固有性に基づいた特別な感情を形成することに深く関わっていることを示唆する事例であると解釈できる。伝統美術・工芸には、文化的多様性への意識を形成する過程で、特に自身の国や地域に根ざしたアイデンティティを育む役割があるのではないだろうか。

美術科教育研究に目を向けると、後述するように伝統美術・工芸を扱った研究において文化多様性との関係性について論じた研究は多いとは言えない。本研究は、美術科教育で育成すべき資質・能力に軸足を置いた上で、伝統美術・工芸を扱った学習が文化多様性の価値理解に影響するのではないかという仮説に基づいている。

本研究の具体的な目的は、文化多様性の価値理解に向けた基盤として、日本の伝統美術・工芸を扱った中学校美術科題材における指導と評価を開発・提案することにある。このため、第2章においては関連する先行研究の動向を概観するとともに本研究の位置づけを明確なものとし、第3章で日本の伝統美術・工芸の現状に関しての予備的な考察を行う。そして第4章では、近年の学習指導要領の趣旨を踏まえて検定・発行された中学校美術教科書の分析を通して日本の伝統美術・工芸を扱った題材の傾向について論じる。第5章においては、具体的な地域を例示した鑑賞を扱った中学校美術科題材を開発するとともに指導と評価について提示することとする。

なお、本稿執筆に際して研究計画の立案・研究全体の統括等については、第一著者である竹内が担当した。各章の構想・執筆・校閲等を含む研究活動全般に関しては、松井・隅・吉岡を加えた著者全員が共同で行った。

## 2. 文化的多様性に関する枠組みと先行研究の動向

文化的多様性に関する国際的な枠組みとしては、2001年の第31回 国際連合教育科学文化機関（ユネスコ）総会で採択された「文化的多様性に関する世界宣言」（UNESCO Universal Declaration on Cultural Diversity、以降「世界宣言」と記述）に遡ることができる。

この世界宣言は12の条文から構成されているが、その第1条では、「時代、地域によって、文化のとり形態は様々である。人類全体の構成要素である様々な集団や社会個々のアイデンティティは唯一無比のものであり、また多元主義的である。このことに、文化的多様性が示されている（後略）」<sup>4)</sup>と述べられている。この条文では、文化的多様性の価値が成立する前提として、個々のアイデンティティの存在が示されている点が重要である。この第1条での記述に関連して佐藤は、美術科教員に対するインタビュー調査に基づき、国際化・グローバル化が進む現代社会において伝統工芸等を学ぶことには日本人としての文化的アイデンティティを培うための手助けとしての重要性があることについて指摘している<sup>5)</sup>。佐藤による伝

統工芸をめぐる学習における文化的アイデンティティ形成の効果についての議論は、本研究の問題意識とも重なり、示唆深い先行研究であるといえる。

そして世界宣言の第7条では、文化遺産との関連で「創造は、文化的伝統の上に成し遂げられるものであるが、同時に他の複数の文化との接触により、開花するものである。従って、いかなる形態の遺産も、多様な文化における創造性を育み、真の異文化間対話を促すために保護・強化され、人類の経験と希望の記録として未来の世代に受け継がなければならない」<sup>6)</sup>と示されている。ここでは文化遺産を過去のものとして捉えるのみではなく、新たな創造につながるもの、異文化間の対話を促すものと定義されている点に特色があると考えられる。このような特色に関連する研究として想起されるのは、福本による論考である。福本は図画工作科・美術科における「伝統と文化」の学習の可能性として、(1)継承型、(2)現代文化折衷型、(3)未来志向型を示している<sup>7)</sup>。特に(3)の未来志向型に関しては、「新しい文化創出や国際理解を基軸とするもの」と説明されている。あわせて教材開発のための視点等も提示されており、「伝統と文化」の学習を図画工作科・美術科における未来志向型の教材を具体化するための方途を示す先駆的な研究であるといえよう。

以上、世界宣言の記述内容を手がかりに、佐藤および福本の言説について述べてきた。伝統美術・工芸に関連して文化的多様性の重視やグローバル化への対応、未来志向等の文脈での主張が見られるものは管見の限り多くないが、上記2つの先行研究の他に新川による研究<sup>8)</sup>および福田による研究<sup>9)</sup>についても言及しておきたい。新川の研究では、中学校美術教科書に掲載された日本絵画に焦点を当ててその傾向について調査するとともに、アンケート調査を通して学校教育における日本絵画の扱いについての検討がなされ、その結論部においてはグローバル化が進展する現代において日本の伝統文化を学校教育で扱う意味について言及されている。また、福田による研究においては、アジア諸外国の美術教育における伝統文化の扱いを踏まえながら、美術科学習において生徒が自己存在を認識する固有の独自文化に触れ、継承し創造することの必要性について述べられている。新川および福田の研究は前述の世界宣言の理念、そして本研究の問題意識と重なる点が多く、このテーマについて議論する上で参照すべき研究であるといえる。

## 3. 日本の伝統美術・工芸の現状

本章においては、日本の伝統美術・工芸の範囲を示すとともに、それらが現在どのような状況にあるのかに関して予備的な考察を行う。

なお、一般的な「美術」「工芸」の用法にはかなりの幅がある。後に例示するように、「工芸」の範疇を含めた説明として「美術」の語が使用される場合があり、一方で

ふたつの語を含んだ「工芸美術」という概念も存在する。本稿においては、この点も考慮しながら伝統美術と伝統工芸の現状に関して議論を進めることとする。

### 3.1. 伝統美術の現状

いわゆる日本の伝統美術の概念がどこまでの範囲を示すものなのかを定義することは容易ではない。ここでは、日本美術を扱った出版物に収録されている対象がどのような領域に分けて示されているのかを手掛かりとして、その輪郭を描出することを試みる。かつて1960年代に小学館から初版が刊行された『原色日本の美術』は、他の美術全集と比較して扱う分野が網羅的であると考えられる。同書では1巻ごとに1領域を紹介する形式をとり、全32巻によって構成されている<sup>10)</sup>。それら32の領域を筆者の判断によって大括りすることを試みると、日本美術の分野はおおよそ以下のようなものになる。

- ・絵画（仏画、絵巻物、水墨画、障屏画、浮世絵、他）
- ・彫刻（仏像、肖像、他）
- ・建築（寺院、神社、霊廟、城、書院、茶室、他）
- ・工芸（陶芸、染織、漆工、金工、他）
- ・書

次に上記の分野のうち、どのようなものを「日本の伝統美術」と位置付けるのかという問題があるが、本稿においては文化財指定されている美術品をはじめ、近代以前からの歴史的経緯を有しており、現代にまで受け継がれている日本美術は「日本の伝統美術」として扱いたいと考える。また、現代において制作されているものであっても、古来の技法や手続きによって表現されているもの、例えば今日の日本画制作や新たな仏像の制作も「日本の伝統美術」に該当するものとして扱う。そして第1章でふれた再建された首里城も歴史的建造物に準ずるものであるため同じく該当するものとして扱う。上記の「絵画、彫刻、建築、工芸、書」は、現代でも芸術活動が継続されており、それぞれの分野において作家が制作した作品を発表する場としての展覧会、およびそれを運営する美術団体等も存在するなど、「日本の伝統美術」が継承される体制はある程度、確立されているといえる。

一方で「日本の伝統美術」の捉え方として、いわゆる芸道という側面も存在する。山本正男（1997）はこのような芸道意識に関して、「じゅうらい、わが国の伝統社会では芸道文化をめぐる、芸術への尊重とその修行の厳しさへの畏敬、また社会組織での伝統や家族制度の重視等から、芸道そのものを社会現実一般から分離し、特殊化する傾向にあった」<sup>11)</sup>と述べている。この山本の指摘は、一般市民と「日本の伝統美術」との間の隔たりを的確に表現するものであり、本稿が目指すような中学校美術科における生徒の文化的多様性の価値理解に向けた基盤づくりにおける問題点を示すものでもある。なぜなら、

「日本の伝統美術」が生徒の意識から隔絶された存在であるとすれば、それとの出会いによって文化的アイデンティティを培うことができるとは考えにくいためである。

### 3.2. 伝統工芸の現状

日本の伝統工芸には、国が指定する「伝統的工芸品」、都道府県が指定する「伝統工芸品」<sup>12)</sup>、国や都道府県による指定はないが特定の地域で引き継がれてきた「工芸品」がある。

「伝統的工芸品」については、伝統的工芸品産業の振興に関する法律（伝産法）に基づき伝統工芸品産業の振興を図るために、国、地方公共団体、産地組合及び団体等の出捐により設立された一般財団法人伝統的工芸品産業振興協会が15の業種に分類し、以下のようなものになり、令和6年10月17日現在243品目ある<sup>13)</sup>。

- ・織物   ・染色品   ・その他の繊維製品   ・陶磁器
- ・漆器   ・木工・竹工品   ・金工品   ・仏壇・仏具
- ・和紙   ・文具   ・石工品   ・貴石細工
- ・人形・こけし   ・その他工芸品   ・工芸材料・工芸用具

また、伝産法により伝統的工芸品は、次の要件が必要であることが規定されている<sup>14)</sup>。

- 一 主として日常生活の用に供されるものであること。
- 二 その製造過程の主要部分が手工業的であること。
- 三 伝統的な技術又は技法により製造されるものであること。
- 四 伝統的に使用されてきた原材料が主たる原材料として用いられ、製造されるものであること。
- 五 一定の地域において少なくない数の者がその製造を行い、又はその製造に従事しているものであること。

日本の伝統工芸は、長い歴史と独自の文化を背景に、さまざまな地域において洗練された高度な技と美意識により発展してきた。また、日常生活で使用される実用品であるとともに芸術性を兼ね備えたものも多く、日本の美術や文化に大きな影響を与えたきた。しかし、現代における伝統工芸は、多くの課題とともに新たな可能性を模索している。

最大の課題の一つは、職人の高齢化と後継者不足である。多くの伝統工芸は手工業に頼った極めて高い技術を要し、その習得には数十年を要することが多い。そのため、若者が職人を志望しても、生計を立てられる収入を得られず、結果的に職人の道を断念し、技術の継承が難しくなっている。

また、伝統工芸は、安価な工業製品や大量生産品、外国からの輸入品が市場に溢れ、高価格帯である伝統工芸



は消費者に受け入れられにくい現状にある。特に若い世代において、伝統工芸に対する関心が薄れていることが、伝統工芸の存続にとって大きな問題となっている。

伝統工芸の技法や素材が消失する危機に瀕している中で、いかにしてその価値を現代の生活に適応させ、次世代へと繋げるかが問われている。前川ら<sup>15)</sup>が「産業が発展するためには、生産される商品の生産拡大や商品の高級化、ブランド化等が一般に必要な要件とされる」と指摘するように高級化やブランド化の検討も重要である。また、柴田<sup>16)</sup>は、高級消費財としての伝統工芸に着目し、「海外の購買者をターゲットに製品作りをしなければならない」と指摘している。伝統工芸は、時代の変化に合わせて消費者ニーズを取り入れ、伝統的な技法を現代的な感覚でアレンジし、新しい商品やコンセプトを生み出し、国内外で人気を集めるようになってきている。

さらに、地域振興の一環として、伝統工芸をもちいたものづくりや工房での体験活動などが観光資源として活用されるようになった。

将来的な展望として、日本の伝統工芸は優れた技術の継承とともに社会的ニーズや時代の変化に適応して発展していくことが求められる。また、デジタルツールを活用した取り組みにも対応していくことが重要である。後世に継承していくためにも、使い手が実際に手に触れ、日常生活において使用することも重要である。隼瀬<sup>17)</sup>が『手仕事』の価値を理解する『使い手』の育成も行われなければ、今後、継続的に『伝統』を継承していくことが困難となると推察できる」と指摘するように、使い手の学習も必要である。学校教育では、伝統工芸に関わるカリキュラムを検討し、導入していくことも今後の課題である。

#### 4. 美術教科書における身近な地域の伝統美術・工芸

前章において現状について言及したように、生徒にとって伝統美術・工芸が縁遠いものであり、かつ関心やニーズが薄い存在であれば、それらを扱った美術科授業を通して文化的アイデンティティーを育むことは難しいと考えられる。そこで本章においては、身近な地域の伝統美術・工芸に着目し、それらが中学校美術教科書においてどのように扱われてきたのかについて概観することを試みる。

中学校学習指導要領においては、平成20年改訂の際にB鑑賞の内容において「身近な地域」における文化遺産を鑑賞の対象として位置付けた記載がなされ、平成29年の改訂においてもそれは踏襲されている。具体的な記述は下記のとおりである（下線は引用者による）。

##### 【平成20年】

(1)イ 身近な地域や日本及び諸外国の美術の文化遺産などを鑑賞し、そのよさや美しさなどを感じ取り、美術文化に対する関心を高めること<sup>18)</sup>。

##### 【平成29年】

(1)イ(イ) 身近な地域や日本及び諸外国の文化遺産などのよさや美しさなどを感じ取り、美術文化について考えるなどして、見方や感じ方を広げること<sup>19)</sup>。

では、この「身近な地域」における文化遺産とはどのようなものだろうか。平成29年の中学校学習指導要領解説美術編によると、身近な地域における鑑賞の対象として「伝統的な工芸品や祭りの山車、建造物などに加えて、家庭にある掛け軸や扇子、風呂敷など」<sup>20)</sup>と具体的に示されている。この解説文から抽出できる「工芸品に関する鑑賞」「祭礼に関する鑑賞」「建造物に関する鑑賞」「生活の中の造形に関する鑑賞」の4分類を視点として中学校美術教科書への掲載事例についての収集を試みる。この収集の手続きは下記の通りである。

- ・収集対象： 平成23年検定 中学校美術教科書（3社より8冊刊行）、令和2年検定 中学校美術教科書（3社より7冊刊行）
- ・収集方法： 収集対象とした教科書の全題材を見つけて、身近な地域の「工芸品に関する鑑賞」「祭礼に関する鑑賞」「建造物に関する鑑賞」「生活の中の造形に関する鑑賞」のいずれかの分類に該当すると判定した題材を収集する。該当した題材におけるリード文や掲載図版の概要をにリストアップする（後掲・表1）。
- ・収集基準： 各分類の鑑賞が題材における学習の中心となっていることを前提とする。表現に関する題材や造形要素を学ぶための題材への付随的要素としての掲載にとどまる場合、美術史年表への掲載等の場合は、該当する題材とは判定しない。

表1に示す収集結果を概観するとともに2つの時期の検定教科書を比較してみると、平成23年検定教科書よりも令和2年検定教科書の方が「身近な地域」における伝統美術・工芸の鑑賞題材の掲載数・分類数ともに多い傾向であることを読み取ることができる。分類ごとの傾向について目を向けると、「工芸品に関する鑑賞」と「生活の中の造形に関する鑑賞」の分類に関しては、両者の要素を含む題材が多くみられた。特に「工芸品に関する鑑賞」に該当した題材は、収集対象とした中学校美術教科書において、質・量ともにかなり充実した内容であるとの印象を受けた。

その一方で、「祭礼に関する鑑賞」および「建造物に関する鑑賞」を学習の中心として扱っている題材は、令和2年検定教科書のみであった。いずれの分類にもあてはまることであるが、限りある誌面においてどの地域の伝

表1 中学校美術教科書における「身近な地域」の伝統美術・工芸に関する鑑賞題材（平成23年、令和2年 検定）

検定年	分類	出版社	題材名 (学年、ページ)	リード文	分類に関連する 掲載図版等
平成23年	工芸品 ・ 生活	開隆堂	「人がつくる、技を極める」 (2・3、pp.58-61)	「わが国では、地域の気候や風土に根ざし、自然の素材を生かした工芸品が各地にあります。それらは、日々の生活の中で使用され、実用的美を備えています。／また、精緻な技巧と現代の造形感覚とが融合した、美術工芸品へと発展したものもあります。用的美を備えた工芸品のすばらしさ、美しさについて学習しましょう」 <sup>21)</sup>	大館曲げわっぱ、ルウンペ、村上木彫堆朱、南部鉄器、箱根青木細工、丸亀うちわ、大阪浪華錫器、勝山竹細工、江戸切子、ほか
	工芸品 ・ 生活	日本文教	「受けつぎつくる人の姿」 (2・3上、pp.46-47)	「伝統的な材料や技法を受けつぎながら、その特色を生かして創作する伝統工芸の世界があります。そこには、確かな技術を守り伝える人々がいます。長い伝統にはぐくまれ、受けつがれてきたものにつくる人の創意工夫が加わり、新しい工芸品が生まれてくるのです。私たちの暮らしを豊かに彩る伝統的工芸品と、それらをつくる人々の姿から伝わるものを感じ取りましょう」 <sup>22)</sup>	西陣織、井波彫刻、鳴子こけし、駿河竹千筋細工、杉桶樽、有松・鳴海絞、土佐和紙、加賀友禅、輪島塗、燕鉦起銅器、常滑焼、堺打刀物、ほか
	工芸品	光村図書	「大地と海の贈り物」 (2・3上、pp.36-37)	「アイヌ民族の代表的な衣装アットゥシは、北海道に多いオヒョウという木の樹皮を主な原料とした織物だ。人々は、この衣装にモレツという渦状文で装飾を施してきた。また、沖縄の紅型は、朱・黄・青などの鮮やかな色を大胆に配した染織だ。八重山上布は、苧麻という植物から織り上げられ、染めた後に海でさらして仕上げている。これらの織物や染織の技術は、土地で取れる材料を用い、風土の中で長い時間をかけて培われてきた。あなたの住む地域にも、今に根付く伝統文化があるだろう。その特色を材料の使い方や、色づかい、技法などから感じ取ってみよう」 <sup>23)</sup>	アットゥシアミブ、八重山上布、紅型、ほか
令和2年	工芸品 ・ 生活	開隆堂	「生活に生きる伝統工芸」 (2・3、pp.88-89)	「長い歴史を受け継ぐ伝統工芸は、それぞれの地域の風土とともに生きる人々の生活を支えてきました。／また、伝統的な技法や材料によって育まれ洗練されてきた美しさは、暮らしに潤いを与えてきました。／私たちの生活の場でも、現代的な感性によってデザインされた機能性と美しさをもつ伝統工芸品を見ることが出来ます。ここでは身近な生活の中で生きる伝統工芸品を鑑賞し、よさや美しさを発見しましょう」 <sup>24)</sup>	若狭塗箸、鉄瓶、曲げわっぱ、簾工芸、ほか
	工芸品 ・ 生活	日本文教	「手から手へ受け継ぐ」 (2・3上、pp.32-33)	「日本の伝統工芸は作品一つ一つが人の手でつくられており、指先の力加減による技や、材料と向き合う心などは現在も受け継がれています。また、伝統の技を生かしながら、現代の生活に合った作品を生み出す取り組みもあります。／つくる人と使う人、過去から現代そして未来へ、それぞれの手から手へ受け継がれながら、私たちの生活の中に生きる伝統工芸について考えてみましょう」 <sup>25)</sup>	南部鉄器、ほか
	工芸品 ・ 生活	日本文教	「受け継ぐ伝統と文化」 (2・3下、p.53)	「日本には、伝統的な材料や技法を受け継ぎながら、その特色を生かして制作する伝統工芸があります。そしてそこには、確かな技術を守り伝える人々がいます。長い伝統に育まれ、受け継がれてきたものにつくる人の創意工夫が加わることで、新しい工芸品が生まれてきます。私たちの暮らしを豊かに彩る伝統的工芸品から伝わるものを感じ取ってみましょう」 <sup>26)</sup>	二風谷イタ、宮城伝統こけし、会津塗、鎌倉彫、燕鉦起銅器、井波彫刻、加賀友禅、松本家具、駿河竹千筋細工、有松・鳴海絞、大阪張り子、姫革細工、備前焼、土佐和紙、山鹿燈籠、ほか
	祭礼	開隆堂	「祭りの造形」 (1、pp.50-51)	「各地の祭りに登場する山車は曳山や屋台とも言われ、祭りの中心となってそれぞれの街を練り歩きます。そこには、地域の風土や伝統を反映した造形的な特徴を見ることが出来ます。／また、山車の制作や修復に必要な技術は、職人たちによって大切に伝えられてきました。地域の伝統を生かした造形や職人の技に注目して鑑賞しましょう」 <sup>27)</sup>	唐津くんちの曳山、祇園祭の山鉦巡行、青森ねぶた祭、ほか
	祭礼	日本文教	「祭りを彩る造形」 (1、pp.56-57)	「昔から祭りでは、神や先祖をまつてきました。現在でも地域の人々の願いを、山車や衣装、お面などの造形物に表して、各地で受け継がれています。／日常とは違った祭りをつくりだすために、どんな造形物が工夫して使われているのか考えてみましょう」 <sup>28)</sup>	祇園祭、鶯舞神事、唐津くんち、ほか
	建造物	日本文教	「日本の世界文化遺産」 (2・3下、p.52)	「世界文化遺産とは、世界遺産条約にもとづいて選ばれた貴重な遺跡や文化財のことです。文化遺産は人類の共通財産であるという認識に立ち、世界の各国が協力し合って、保護し、次の世代へ受け継いでいく必要があります。／世界遺産条約とは、1972年のパリのユネスコ総会で採択された条約のことで、世界遺産には、文化遺産のほかに自然遺産と複合遺産があります」 <sup>29)</sup>	中尊寺金色堂、日光東照宮陽明門、国立西洋美術館、白川郷、姫路城、法隆寺五重塔、原爆ドーム、勝連城跡、大浦天主堂

※ 下線は引用者による。分類の表記については下記のように略記した。

「工芸品」：工芸品に関する鑑賞、「祭礼」：祭礼に関する鑑賞、「建造物」：建造物に関する鑑賞、「生活」：生活の中の造形に関する鑑賞

統美術・工芸をとりあげて教科書題材を構成していくのかについては、編集上の難しい判断となるのではないかと想像される。教科書に掲載された図版や言及されている地域は、あくまでも例示であると解釈することが妥当であろう。

各題材のリード文に着目すると、一部を除いて生徒に対する鑑賞の方向付けがなされている（表1において下線を付した）。そこで言及されている鑑賞の視点を要約すると以下のようなものとなる。

- ・用の美を備えた工芸品のすばらしさや美しさ
- ・伝統的工芸品をつくる人々の姿
- ・地域に根付く伝統文化の特色
- ・伝統工芸品のよさや美しさ
- ・生活の中に生きる伝統工芸
- ・地域の伝統を生かした造形や職人の技
- ・日常とは違った祭りをつくりだすための工夫

教科書に掲載された図版を授業で扱うことも意義深いですが、上に列記した視点から身近な地域の伝統美術・工芸のよさや美しさなどについて考えることができる鑑賞の活動を構成することも重要であると考えられる。

たまたま生徒の生活圏内にある伝統美術・工芸が教科書に掲載されることは、ある意味権威付けをされたと言う認識を生徒にも与える可能性がある。身近で見慣れた伝統美術・工芸が取り上げられることは、生徒がそれらの価値に目を向けるきっかけになり得ることは容易に予想されるであろう。しかし、自校の身近な地域に該当する伝統美術・工芸の図版が直接的に教科書に掲載されていない場合であっても、上に列記した鑑賞の視点に基づいて独自の授業を構成することは可能である。逆説的に言えば、教科書に図版が掲載されているという理由だけで、身近でない地域の伝統美術・工芸を扱ったとしても、生徒が実感を伴って造形的な視点について理解したり見方や感じ方を広げたりすることができる授業を実現することは難しいのではないだろうか。

## 5. 祭礼に関する鑑賞を扱った題材の指導と評価

本章では、「祭礼に関する鑑賞」に着目した題材を開発・提案したいと考える。「祭礼」を選択した理由としては、本研究において中心的な問題として扱っている文化的アイデンティティーを育成することとの親和性が高いと考えたためである。祭礼は生徒の生活経験にも近い存在であり、そこで使用される山車を造形的な視点から学習することは、地域とのつながりを感じながら美術文化に対する関心を高める上で効果的であるとも判断した。

以下、兵庫県神戸市内に所在する中学校における美術科での指導という仮定のもとで、祭礼の山車を鑑賞対象とする指導と評価の計画を含んだ授業事例<sup>30)</sup>を提案する。

### <題材名>

見つけよう！祭りの美

### <内容のまとめり>

第1学年 「作品や美術文化などの鑑賞」

（「B鑑賞」(1) ア(7) イ(4)、〔共通事項〕(1) アイ）

### <題材の概要>

本題材は、身近な祭りの山車を鑑賞して造形的な視点からよさや美しさに気づくとともに、日本各地の山車を鑑賞することを通して地域ごとの特色ある伝統美術・工芸を捉え、文化の多様性について実感を持って考えるものである。

山車については、「祭礼に出る練り物の屋台。山、鉦（ほこ）、人形などで飾りたてて、これを大ぜいで担ぐか車に乗せて引く」<sup>31)</sup>と記されている。特に本題材で中心的に扱う神戸市東灘区のだんじりについては、「曳きだんじりに分類され『神戸型』と呼ばれ、『飾り幕・山形提灯・外ゴマ』があるのが特長」<sup>32)</sup>と説明されている。このような地域ごとの特色に気づき、身近な地域の祭礼のよさや美しさ、各地の山車の多様性について考えるなどして、見方や感じ方を広げる学習としたい。

### <主な鑑賞作品>

1 時間目：「東灘だんじり祭」（神戸市東灘区）で使用するだんじり

2 時間目：日本各地の祭礼で使用される山車

### <題材の目標>

(1) 「知識及び技能」に関する題材の目標

- ・形や色彩などが感情にもたらす効果や造形的な特徴などを基に伝統的な造形を全体のイメージや作風などで捉えることを理解する。（〔共通事項〕(1)）

(2) 「思考力、判断力、表現力等」に関する題材の目標

- ・身近な地域および日本各地の文化遺産から造形的なよさや美しさを感じ取り、美術文化の独自性と多様性について考えるなどして、見方や感じ方を広げる。（「B鑑賞」(1)）

(3) 「学びに向かう力、人間性等」に関する題材の目標

- ・美術の創造活動の喜びを味わい、楽しく伝統的な美術文化などの見方や感じ方を広げる鑑賞の学習活動に取り組もうとする。

### <題材の評価規準> 表2 参照

### <指導と評価の計画> 表3 参照



表2 題材の評価規準

「知識・技能」	「思考・判断・表現」	「主体的に学習に取り組む態度」
<b>知</b> 形や色彩などが感情にもたらす効果や、造形的な特徴などを基に伝統的な造形を全体のイメージや作風などで捉えることを理解している。	<b>鑑</b> 身近な地域および日本各地の文化遺産から造形的なよさや美しさを感じ取り、美術文化の独自性と多様性について考えるなどして、見方や感じ方を広げている。	<b>態鑑</b> 美術の創造活動の喜びを味わい、楽しく伝統的な美術文化などの見方や感じ方を広げる鑑賞の学習活動に取り組もうとしている。

表3 指導と評価の計画（全2時間）

●学習のねらい・学習活動	知・技	思	態	評価方法・留意点
<b>1. 鑑賞（1時間）</b>  <b>●</b> わたしたちの地域で行われる祭礼「東灘だんじり祭」で使用されるだんじりを鑑賞して造形的なよさや美しさについて考え、見方や感じ方を広げる。 ・画像や動画によってだんじりを鑑賞し、造形的な特徴について着目しながら彫刻や装飾などについて感じたことを付箋紙に記入して、それをもとにグループで意見交流する。 ・だんじりの造形を全体のイメージなどで捉え、「和風でさびやか」「重厚感があって強そう」等、自分なりの見方や感じ方を言語化して学級全体で発表・交流する。	<b>知</b> ↓ ↓	<b>鑑</b> ↓ ↓	<b>態鑑</b> ↓ ↓	<div> <b>知</b> だんじりの造形的な特徴に着目して、全体のイメージや作風などで捉えることを理解することができるよう指導を行う。【ワークシート、発言内容】             </div> <div> <b>鑑</b> 付箋紙を使った意見交流を行うを通して、身近な地域の文化遺産の造形的なよさや美しさについて考えるなどして、見方や感じ方を広げることができるよう指導を行う。【付箋紙、活動の様子】             </div> <div> <b>態鑑</b> だんじりを楽しく鑑賞し、身近な地域の文化遺産の造形的なよさや美しさなどを感じ取ろうとする意欲が高まるよう指導を行う。【活動の様子、ワークシート、付箋紙】             </div>
<b>2. 鑑賞（1時間）</b>  <b>●</b> 東灘のだんじりと日本各地の祭礼で使用されている山車を比較して鑑賞し、美術文化について考え、見方や感じ方を広げる。 （比較する対象としては、教科書の掲載図版を活用して祇園祭（京都府）、唐津くんち（福岡県）等を取り上げることが考えられる）。 ・だんじりや山車に見られる相違点や地域ごとの文化の特色について考え、気づいたことをワークシートに記入する。 ・「わたしたちの地域のだんじりや各地の山車のよさや美しさとは何か」という問いに対する自分なりの意見を考え、学級全体で話し合う。			<b>態鑑</b> ↓ ↓	<div> <b>知</b> 日本各地の山車等の形や色彩などが感情にもたらす効果、構造や構成の美しさなどを捉えることを理解することができるように指導を行う。【ワークシート、発言内容】             </div> <div> <b>鑑</b> 比較鑑賞を行うを通して、日本各地の美術文化の多様性について考えるなどして、見方や感じ方を広げることができるよう指導を行う。【ワークシート、発言内容】             </div> <div> <b>態鑑</b> 日本各地の山車等を比較する鑑賞に楽しく取り組んでいるかどうかを確認する。必要に応じて東灘のだんじりの特徴を再確認させるなどの指導を行う。【活動の様子】             </div> <div> <b>態鑑</b> 山車等を楽しく鑑賞し、感情にもたらす効果や全体のイメージなどで捉えることを理解しようとし、文化遺産のよさや美しさなどを感じ取ったり、独自性と多様性について考えようとしたりしているかを評価する。【活動の様子、ワークシート】             </div>
<b>&lt;授業外：題材が終了後&gt;</b>	<b>知</b>	<b>鑑</b>		<div> <b>知</b> 山車等の形や色彩が感情にもたらす効果、構造や構成の美しさを捉えることについて、そして山車等の造形的な特徴に着目して、全体のイメージや作風などで捉えることを理解しているかどうかについて評価する。【ワークシート】             </div> <div> <b>鑑</b> 身近な地域および日本各地の文化遺産の造形的なよさや美しさを感じ取り、美術文化の独自性と多様性について考えるなどして、見方や感じ方を広げているかどうかを見取り評価する。【付箋紙、ワークシート】             </div>

※上記における記号や字体等のルールについては、国立教育政策研究所による学習評価に関する参考資料<sup>33)</sup>を参照のこと（**知**＝「知識・技能」の知識、**鑑**＝「思考・判断・表現」の鑑賞、**態鑑**＝鑑賞における「主体的に学習に取り組む態度」に関する評価規準）。

以上、祭礼の山車を扱った鑑賞の指導と評価についての提案を試みた。表3において詳細に言及していないが、実際の学習活動ではデジタルコンテンツやICT機器等を活用することが効果的であると考えられる。近年は動画共有サイト等を通して、多様な祭礼の動画コンテンツを閲覧することが可能である。また、教科書に掲載されている祭礼が行われる地域の中学校と連携し、互いの地域の祭礼で使用される山車をオンラインで紹介し合う活動などもICT機器を活用することで手軽に実施することができる。生徒自身にとっての身近な地域の造形に誇りや愛着を感じながら多様な地域の特色について考えるなどして、見方や感じ方を広げ、文化的アイデンティティを育成することができる学習活動を展開することが期待される。

## 6. おわりに

これまでの議論を総括し、本研究における成果について3段階に分けて以下に列記する。

- 日本の伝統美術・工芸の現状を予備的に考察した上で、文化的アイデンティティ育成の視点として身近な地域の文化遺産の鑑賞に着目した（第3章）。
- 中学校美術教科書に掲載された身近な地域の文化遺産の鑑賞題材を収集し、各題材のリード文から独自の題材開発の可能性を示した（第4章）。
- 祭礼に使用される山車等を鑑賞する活動を扱った題材を開発し、指導と評価の計画を含んだ授業事例を提案した（第5章）。

これらの成果の一方で、第5章において提案した題材を実際の指導に取り入れるためには、どのようにして限られた中学校美術科の授業時数の中に組み込んでいくのかという課題も残されている。そのための一方策としては、本稿での成果として示した身近な地域の文化遺産の鑑賞を「B鑑賞」(1)イ(イ)として単独で扱うのではなく、同ア(ア)またはア(イ)、イ(ア)等と兼ね合わせた内容として年間指導計画を構成することなどが考えられる。

今後の計画としては、本研究の成果を実践に移して学習効果の分析を行うことを検討している。そして、本稿においては「祭礼に関する鑑賞」に焦点を当てたが、他の分類等についても授業事例の開発を進めていきたいと考えている。これらの具体的な内容については、稿を改めて報告する予定である。

### 付記：

本研究はJSPS科研費23K02411（研究代表者：竹内晋平）の助成を受けたものです。第一著者（竹内晋平）は、日本文教出版株式会社が刊行する中学校美術教科書（令和2年検定）の編集に著者として参画している。

## 注

- 1) 文部科学省『中学校学習指導要領解説 美術編』, 日本文教出版, p.101, 2018.
- 2) 内閣府 総合科学技術・イノベーション会議 教育・人材育成ワーキンググループ「Society 5.0の実現に向けた教育・人材育成に関する政策パッケージ」, 2022年。  
下記URLを2024年9月23日確認。  
[https://www8.cao.go.jp/cstp/tyousakai/kyouikujinzai/saishu\\_print.pdf](https://www8.cao.go.jp/cstp/tyousakai/kyouikujinzai/saishu_print.pdf)
- 3) 下記は、WEB上で閲覧できた報道例である（いずれも2024年9月23日確認）。  
朝日新聞デジタル『「神様みたいな存在」立ち尽くす 住民に涙 首里城火災』(2019年10月31日掲載)。  
<https://www.asahi.com/articles/ASMB020PLMB0TPOB00B.html?msockid=1c50aaee4ee16f0c1425b9994f566e62>  
FNN プライムオンライン「首里城焼失『泣きながら登校する子どもも…』 沖縄県民絶句 観光客にも衝撃」(2019年10月31日掲載)。  
<https://www.fnn.jp/articles/-/19590>  
沖縄タイムス「なぜ若い人まで首里城火災に泣いたか 思い乗せて、歴史の光と影を物語る城へ」(2020年12月21日掲載)。  
<https://www.okinawatimes.co.jp/articles/-/681662>
- 4) 文部科学省 WEB サイト（日本ユネスコ国内委員会）「文化的多様性に関する世界宣言（仮訳）」（更新日不明）。  
下記URLを2024年9月23日確認。  
<https://www.mext.go.jp/unesco/009/1386517.htm>
- 5) 佐藤真帆「日本の中学校における文化遺産としての伝統工芸の指導」, 『千葉大学教育学部研究紀要』, 第71巻, pp.349-356, 2023.
- 6) 文部科学省, 前掲 WEB サイト.
- 7) 福本謹一「図画工作科・美術科における「伝統と文化」の学習」, 安部崇慶・中村哲編『「伝統と文化」に関する教育課程の編成と授業実践』, 風間書房, pp.102-103, 2012.
- 8) 新川美湖「中学美術における『日本の美術文化の継承と創造』の考察－日本の伝統絵画教育の変遷と現状－」, 大学美術教育学会, 『美術教育学研究』, 第52号, pp. 281-288, 2020.
- 9) 福田隆眞「中学校美術科教育の主題と領域の一考察－アジアにおけるグローバル化と独自文化の形成－」, 山口大学教育学部附属教育実践総合センター, 『教育実践総合センター研究紀要』, 第56号, pp.229-236, 2023.



- 10) 『原色日本の美術』(小学館より刊行, 初版 1968 年) 全 32 巻のタイトルは次の通り, 1 原始美術, 2 法隆寺, 3 奈良の寺院と天平彫刻, 4 正倉院, 5 密教寺院と貞観彫刻, 6 阿弥陀堂と藤原彫刻, 7 仏画, 8 絵巻物, 9 中世寺院と鎌倉彫刻, 10 禅寺と石庭, 11 水墨画, 12 城と書院, 13 障屏画, 14 宗達と光琳, 15 桂離宮と茶室, 16 神社と霊廟, 17 浮世絵, 18 風俗画と浮世絵師, 19 南画と写生画, 20 南蛮美術と洋風画, 21 面と肖像, 22 陶芸 (1), 23 陶芸 (2), 24 染織・漆工・金工, 25 甲冑と刀剣, 26 書, 27 在外美術 (絵画), 28 請来美術 (絵画・書), 29 請来美術 (陶芸), 30 近代の日本画, 31 近代の洋画, 32 近代の建築・彫刻・工芸。  
上記のタイトル内に, アイヌや琉球などの地域における伝統美術が言及されていないことには留意が必要である。これは『原色日本の美術』が刊行された当時の日本美術史研究の範囲を反映したものであると考えられるが, 現在の東京国立博物館・本館(日本ギャラリー)のジャンル別展示には「彫刻」「刀剣」「陶磁」等のほか, 「アイヌと琉球」が常設されている。東京国立博物館のジャンル別展示については下記の公式 WEB サイト URL を参照のこと(更新日不明)。  
[https://www.tnm.jp/modules/r\\_exhibition/index.php?controller=hall&hid=12](https://www.tnm.jp/modules/r_exhibition/index.php?controller=hall&hid=12)
- 11) 山本正男『生活美学への道』, 勁草書房, p.117, 1997.
- 12) 都道府県が指定する伝統工芸品は, 「伝統工芸品」や「ふるさと伝統工芸品」, 「郷土伝統工芸品」など名称は様々である。また, 指定条件なども都道府県により異なる。
- 13) 一般財団法人 伝統的工芸品産業振興協会 WEB サイト。  
下記 URL を 2024 年 11 月 1 日確認。  
<https://kyokai.kougeihin.jp/traditional-crafts/>
- 14) 伝統的工芸品産業の振興に関する法律(昭和四十九年法律第五十七号), 平成 25 年 6 月 14 日施行。
- 15) 前川洋平他『「伝統的工芸品産業の振興に関する法律」の効果と課題』, 東京農業大学, 『東京農業大学農学集報』, 58 巻 (2), 85-91, 2013.
- 16) 柴田徳文「伝統文化の継承と発展ー伝統工芸の将来ー」, 国士舘大学アジア・日本研究センター, 『Asia Japan Journal』, 10 号, 2015.
- 17) 隼瀬大輔『「工芸」における『伝統』に関する一考察』, 大学美術教育学会, 『美術教育学研究』, 第 49 号, pp.321-328, 2017.
- 18) 文部科学省『中学校学習指導要領解説 美術編』, 日本文教出版, p.44, 2008.
- 19) 前掲書 1), p.70.
- 20) 同上書, pp.74-75.
- 21) 日本造形教育研究会『美術 2・3』, 開隆堂出版, pp. 58-61, 2012.
- 22) 春日明夫・長田謙一・大橋功・小泉薫ほか『美術 2・3 上』, 日本文教出版, pp.46-47, 2012.
- 23) 酒井忠康・上野行一・岡田匡史・佐藤泰生ほか『美術 2・3 上』, pp.36-37, 2012.
- 24) 日本造形教育研究会『美術 2・3』, 開隆堂出版, pp.88-89, 2021.
- 25) 村上尚徳・大橋功・佐藤賢司・川合克彦・長澤博昭・小泉薫・鷹野晃・竹内晋平ほか『美術 2・3 上』, pp.32-33, 2021.
- 26) 村上尚徳・大橋功・佐藤賢司・川合克彦・長澤博昭・小泉薫・鷹野晃・竹内晋平ほか『美術 2・3 下』, p.53, 2021.
- 27) 日本造形教育研究会『美術 1』, 開隆堂出版, pp.50-51, 2022.
- 28) 村上尚徳・大橋功・佐藤賢司・川合克彦・長澤博昭・小泉薫・鷹野晃・竹内晋平ほか『美術 1』, pp.56-57, 2021.
- 29) 前掲書 25), p.52.
- 30) 授業事例の作成にあたり下記の参考資料を参照した(表 2・3 についても同様である)。  
国立教育政策研究所 WEB サイト, 「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料」(更新日不明)。  
下記 URL を 2024 年 11 月 13 日確認。  
[https://www.nier.go.jp/kaihatsu/pdf/hyouka/r020326\\_mid\\_bijyut.pdf](https://www.nier.go.jp/kaihatsu/pdf/hyouka/r020326_mid_bijyut.pdf)
- 31) JapanKnowledge, 渡辺伸夫「山車」『日本大百科全書(ニッポニカ)』 < <https://japanknowledge.com> >, 2024 年 11 月 18 日確認。
- 32) 神戸市 WEB サイト「東灘区のだんじり」(最終更新日 2024 年 11 月 12 日)。  
下記 URL を 2024 年 11 月 19 日確認。  
<https://www.city.kobe.lg.jp/b07715/kuyakusho/higashinadaku/shoukai/shoukai/danjiri/index.html>
- 33) 前掲 WEB サイト 30) を参照。

